

とくがわみつくに

徳川光圀

『大日本史』編さんを始めた水戸藩主 水戸市・常陸太田市



(久昌寺蔵)

寛永5年(1628)一元禄13年(1700)。水戸藩初代藩主徳川頼房の第三子。家臣三木之次の家で誕生し養育される。寛永13年(1636), 9歳で元服し光国を名乗る(56歳の時に「光圀」の字に改める)。三男でありながら、水戸徳川家の後継ぎに決まる。寛文元年(1661), 父頼房が没し水戸藩第2代藩主となる。その後30年間藩政を主導, 人々から名君と称えられた。少年時代には奔放な態度の目立った光圀は, 18歳の時, 中国の歴史書『史記』の「伯夷伝」を読み, 今までの生活を反省し, 以後学問に精進する。『史記』にならい『大日本史』の編さんを始め, 編さん所である彰考館に, 全国からすぐれた学者を招き, その事業にあたらせる。藩主を辞めた後, 西山御殿(西山荘)で過ごす。諡は義公。

徳川光圀は、水戸藩初代の藩主徳川頼房の三男として生まれました。寛永10年(1633)5歳の時、父の跡を継ぐことに決まり、翌年、6歳で江戸に入りました。将軍の徳川家光に会い、家光の光の字を与えられ、「光国」と名乗るようになるのは9歳の時からです(56歳の時から「光圀」の字に改めます)。

父は、光圀を立派な武将にするために、12歳の夏、浅草川〔隅田川〕に連れて行き、水泳の腕前を試そうとしました。その年は飢饉で作物があまりとれず、飢えて死んでしまった人が川に浮いていたといわれますが、その中を泳いで向こう岸まで渡ったのです。父はその勇気をほめてくれましたが、その後の光圀は家来が止めるのも聞かず、町の中を人目を引くような派手な格好をして歩き回り、町の人たちから「まるで歌舞伎ものようだ。」といわれ、父や家来たちを困らせることもありました。

ところが、18歳の時に中国の司馬遷という人が書いた『史記』の中の「伯夷伝」を読んで大変感動します。

(今までの自分ではだめだ。これからは自分を変えていこう。)

それまでの自分のふる舞いを振り返り、これを改めることにしました。

藩主となった光圀は、笠原水道の敷設、寺院の整理、葬式の簡略化、貧しい農民たちの救済など様々な政策を実施しますが、中でも最大の仕事は『大日本史』の編さんです。

この書物の編さんは、新しい日本の歴史書を作りたいという強い思いから始められ、完成までに250年という長い年月がかかった水戸藩の大事業となるのです。



『大日本史』(茨城県立歴史館蔵)

この歴史書を作るための編さん所として彰考館が作られ、全国からたくさんの学者や書物が集められました。彰考館という名前は、「彰往考来<過去を明らかにして将来を考えるという意味>」という中国の古典にある言葉からつけられたものです。

光圀は、明〔中国〕から日本に来ていた朱舜水という学者を水戸藩に招き、舜水から幅広く学問を学びました。また、蝦夷地〔北海道〕の探検を目的とし、「快風丸」と名付けた巨大な船も作りました。

光圀は、医療・医学にも目を向け、京都などから有名な医者を水戸藩に呼んだり、屋敷内に薬を蓄えたり、家来の医者に『救民妙薬』という書物を作らせたりしました。この本は、だれにでも簡単に手に入る材料で薬を作る方法を書いたもので、これを農村に配り、少しでも領民の医療に役立てようとしたのです。

元禄3年(1690)に藩主を辞めた光圀は、翌年、藩内の新宿村〔常陸太田市〕に西山御殿(西山荘)という隠居所を建てて、亡くなるまで約10年過ごしました。

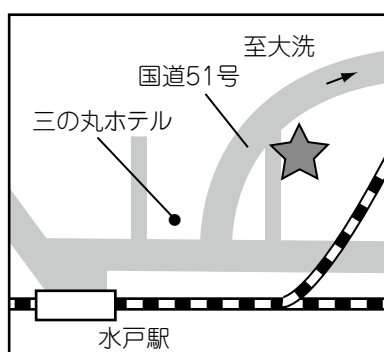
光圀の名前は、今では助さん・格さんを連れ全国を旅して、悪い行いをする人たちをこらしめる「水戸黄門」としてよく知られていますが、この話は、明治時代に水戸黄門が諸国を漫遊するという物語がつくられてから広まったもので、事実ではありません。もっとも、助さん・格さんは『大日本史』編さんのために活躍した佐々介三郎と安積寛兵衛がそれぞれモデルといわれ、光圀自身も、藩主を辞めてからはしばしば藩内の各地を見て回っています。水戸黄門漫遊の物語はこうしたエピソードがもとになって作られた物語です。

ゆがりのスポットに行ってみよう

義公生誕の地

所在地 水戸市三の丸2-23-5

内容 三木之次の元の屋敷の近くにあり、現在は神社が建てられています。



おもな
参考文献

『水戸市史中巻(一)』(水戸市・1968)

『徳川光圀』(鈴木暎一・吉川弘文館・2006)